

THIS IS FINLAND

2025-26

オーロラ予報
当たり年が続く！

平和を築く
4つの方法

「彼女は海を
崇拝していた」
トーベ・ヤンソンと
ムーミンの
精神を受け継ぐ

お気に入りの
3つのサウナ

俳優アルマ・ポウステイ
私たちが思いやりを
忘れない限り
希望はある

THIS 4 IS



16



40



制作の舞台裏から

「アルマ・ポウスティの写真は、インタビューテーマに沿って、フィンランドのデザインの歴史と文化を最もよく表現できる場所で撮影したいと思っていました。ヌルメスニエミというデザイン界の大物カップルの自宅アトリエは、その目的に完璧にマッチしていました。この1960年代の建物は時代を超越した傑作で、11月の曇りの日でも、心地よさと安らぎで私たちを包んでくれました」

ART DIRECTOR EEVA VÄRTÖ

3 編集部より

4 表紙・アルマ・ポウスティ 二極化したこの世界を救えるのは文化だと信じて

10 オーロラ 魔法のようなオーロラを科学する

16 フォトエッセイ サウナ愛好家3人のお気に入りのサウナを紹介

24 図書館 犬への読み聞かせから3Dプリントまで - フィンランドの図書館でできる7つの素敵なこと

26 地元の食材 シェフのレミ・トレムイコは、すべての食材を近隣の農場、湖、森で手に入れています

32 ルールに縛られない アーティストで父親でもあるチーム・ケイステリは、この国で子どもにとってベストな文化は無料であることを知っています

34 食 フィンランド人のようにじゃがいもを愛すべき5つの理由

36 平和への道のり 平和構築に携わる4人がその方法を紹介

40 旅 ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソンの精神を受け継ぐ

FINLAND

TEXT: MIKA HAMMARÉN PHOTOGRAPHY: NINA KARLSSON

お祝いは ムーミン流で

多才なアーティスト、トーベ・ヤンソン（1914-2001）の作品『ムーミン』が、今年で出版80周年を迎えます。ムーミンの第一作『小さなトロールと大きな洪水』が出版されたのは、欧州が第二次世界大戦から復興しようとしていた頃でした。行方不明のムーミンパパを探す物語で、ムーミン一家にとって故郷と呼べるような平和な場所「ムーミン谷」を舞台にしています。

ムーミン一家の冒険は、私たちが生きる今の時代にも通じています。私たちの多くは、ムーミン谷に逃げ込んで、この素晴らしい架空の生きものたちの愛情あふれる家族の一員になりたいと思うことがあるかもしれません。

自分だけの楽園を築きたいと思いながら一生を過ごしたヤンソンにとって、フィンランドは最高の舞台となりました。フィンランドは世界で初めて女性に完全参政権を認めた国であり、トーベも女性が自分のやりたいことを自由にできるようになった最初の世代に属しています。

さらに、土地の所有権に関係なく、誰もが自然を楽しむことができる「自然享受権」が確立されました。ヤンソンは群島に旅し、小さな島にテントを張り、弟のラルスと即席の小屋を建てました。こうした解放的で自立心を与えてくれる冒険は、彼女の芸術に大きな影響を与えました。

今日でも、トーベ・ヤンソンの芸術は自分らしくいる自由と勇気を象徴しています。ムーミンをどのように解釈するか、好きなキャラクターは誰か、どんな種類のケーキが好きかなどは関係ありません。ムーミンを讀めることは常に平和、自然、平等、そして自由を讀めることなのです。

this is
FINLAND.fi

EDITOR-IN-CHIEF Mika Hammarén

EDITORIAL BOARD Mika Kukkonen,

Samuli Laita, Peter Marten, Meira Pappi,

Salla Salovaara, Tuula Sjöstedt

EDITORIAL STAFF Sanoma Content Studio

COVER PHOTO Mikael Niemi

PRINTED BY Grano Oy, Bellthree

PUBLISHERS Ministry for Foreign Affairs of Finland

um.fi, Business Finland businessfinland.fi,

Sitra sitra.fi

JAPANESE EDITION Embassy of Finland in Tokyo



Photography: Heli Blåfield, Per Olov Jansson, Mikael Niemi

数々の映画賞に輝く俳優アルマ・ポ
ウスティにとって、文化は侮れない
力を持っています。文化は少なくと
も4つの方法で、二極化した世界の
人々が理解し合うのに役立つと、
彼女は言います。

境界を
越えて



幼い頃、アルマ・ポウスティは世界中の本を読破したいと考えていました。

ジャンプスーツ：Vuokko Loikka、靴：Terhi Pölkki

2024年の初め、俳優アルマ・ポウスティ(1981年生まれ)の姿は、銀幕の中でなく観客席にありました。自分の演技を見るためではなく、観客の反応を観察するためでした。アキ・カウリスマキ監督の映画『枯れ葉』の海外プロモーションに参加した彼女は、ある特別なことに気づきました。「世界のどこでも、人々はこの映画の中にある同じものに魅了され、感動していました」。職を転々とする労働者階級の女性アンサを演じた彼女は、ゴールデングローブ賞にノミネートされました。

次のプロジェクトのリハーサルを終えたばかりのアルマ・ポウスティは、文化の普遍性はどうしたら感じられ、それが私たちをどう近づけてくれるのか語ってくれました。

1. 思いやり
「互いを思いやる気持ちがある限り、希望はあります」

ポウスティは映画賞のノミネート、受賞といった国際的評価を受けるようになる以前、様々な演劇、国内プロジェクト、声優などの仕事に携わっていました。一躍有名になったのは、比較的最近のことです。

『枯れ葉』のプロモーション活動中、ポウスティは映画が観客の心にどのように響くか、目の当たりにしました。静かなバー、ビールグラス、フィンランドの伝説的ロックバンドHurricane(フリガネス)の曲など、フィンランド特有のモチーフがふんだんに盛り込まれているにもかかわらず、この映画はアメリカ、日本、メキシコ、その他の国々の観客に感動を与えました

「この映画の魔法は、その人間味にあると思います」と、ポウスティは言います。「互いを思いやる気持ちがある限り、希望はあるのです」

彼女とユッシ・ヴァタネン演じる役柄の恋愛関係だけでなく、この映画におけるすべての人間関係、そして人生全般を指して言っています。



『枯れ葉』では、アルマ・ポウスティは偶然にもアルマという名前の犬とも共演しました。

「恋に落ちたり、内気なのに勇気を出さなければならないのが
どれほど難しいことか、みんな知っています」

「思いやりとは恋愛関係だけではなくありません。それは犬、友人、同僚、そして自然にも及びます。世界は結びつきで動いているのです」

ちなみにここで彼女が触れた「犬」とは『枯れ葉』で共演した犬で、偶然にもアルマという名前でした。アルマは主人公アンサが保護した野良犬です。ポウスティはカプチーノを置いて、こう言いました。

「素晴らしい俳優仲間です。とても才能があり、ユーモアのセンスとリズム感が素晴らしい」

『枯れ葉』ではその結びつきが、ジェスチャーや見逃してしまうような瞬間を通して築かれます。犬を救う、照れ笑い、微妙なウィンク、手を握りしめる――映画は愛というテーマを、盛り上がるサウンドトラック、溢れる台詞、感情の爆発で埋めてしまいがちですが、すべてを削ぎ落した後、核に残るのが「思いやり」です。

ポウスティの最近や今後の映画プロジェクトは、何らかの形で人間関係、思いやり、愛のさまざまな段階や形に関係しています。『TOVE/トーベ』では、フィンランド人アーティストで作家のトーベ・ヤンソンを演

じ、彼女が強烈に愛した舞台演出家のヴィヴィカ・バンドラーとの出会いが描かれました。『4人の小さな大人たち』では、ポリアモリーを探究するために結婚生活をオープンにするユーリア役を演じ、2025年公開のスリラー『オランダ』では未亡人を演じます。ストーリーは異なっても、テーマに馴染みがなくても、根底にある経験は広く通じるものがあります。

「誰もが孤独の何たるかを知っています。そして恋に落ちたり、内気なのに勇気を出さなければならないのがどれほど難しいことかも」

そうでなければ、何も変わらないからです。

2. 探求
「ああだ、こうだと結論を急いではなりません」

ザイダ・バリルット監督が手がけた評価の高い伝記映画のトーベ・ヤンソン役を射止めたとき、ポウスティはこれが大きな挑戦になると感じていました。さまざまなドキュメンタリーや本で人生や作品が語り尽くされてしまった人物を演じるのは、

周囲からの大きな期待を背負うものでした。

「ザイダがこう言ったのを覚えています。私たちには失敗しかないのは明らか。それなら、面白い方法で失敗しようね」と。

この言葉で、二人は自分たちに失敗することを許しただけでなく、すべてをまっさらな状態にリセットしたのです。そのおかげで、トーベ・ヤンソンの考えを探究し、彼女に新しい光を当てることができました。このアプローチはうまくいきました。北欧最大の日刊紙『ヘルシンギン・サノマツ』の批評家は、「ヤンソンが踊ると、見る者は彼女が外界からの期待や要求を振り払おうとしているのが感じられる」と、総括しています。

ポウスティは、自分自身だけでなく、創造プロセスにも挑もうとしていることは明らかです。彼女はどんな状況や思想も固定的にとらえるのではなく、芸術的プロセスを現在進行形の探求として捉えています。

「ああだ、こうだと結論を急いではなりません。探究心や好奇心は健全なものであり、それがなければ



アルマ・ポウスティの写真撮影は、デザイン界の大物カップル、ヴォッコとアンティ・ヌルメスニエミの自宅アトリエで行われました。

行き詰まる危険性があります。人生や文化、芸術や政治においてそれは非常に危険なことです」と、彼女は言います。

新しい視点を探求するため、ポウスティがよくするのは本を読むことです。子供の頃から読書好きで、母親の読み聞かせを聞いた後も、自分の部屋で懐中電灯の明かりを頼りに布団の中でこっそり読んでいました。「幼い頃、世界中の本を読破したいと思っていました。しばらく、そのことでとてもワクワクしていたのですが、十分な時間がないと悟ったのです」と、彼女は言います。

3. 耳を傾ける 「耳を傾け、対話をする能力は、生き残るために必須です」

毎年春、世界有数の文学者たちを集めて翻訳文学の祭典「ヘルシンキ・リット」が開催されています。過去3年間、ポウスティがこのフェスティバルの司会進行を担当してきました。ピューリッツァー賞やノーベル賞の受賞者たちがステージに立つ一方で、ポウスティが感激するのはフェスティバルの聴衆の様子と、チケットが発売と同時に売り切れてし

まうという事実です。

「作家と翻訳者の議論に、人々は熱心に耳を傾けます」

「そのことが私にとって励みになるんです。感じ方の違いは別として、私たちは他の人や世界に興味があるんです」

世界的な混乱、パンデミック、経済的苦難、戦争、気候危機の時代に芸術にたずさわることは、ポウスティにとってしばしば自分の信念が試されているかのように感じられます。しかし、結びつきの瞬間が彼女に希望も与えてくれます。例えばフェスティバルの聴衆がどのように耳

を傾けるかをみた瞬間。

あるいは、『枯れ葉』がロシアのウクライナ攻撃を扱っていることを、映画ファンが評価する瞬間。いくつかのシーンで、登場人物たちは戦争に関連したラジオニュースに耳を傾けます。カウリスマキの勇気と、この映画の物語の一部に戦争があることを、観客は高く評価していると、ポウスティは言います。

「劇的なことも含めて、私たちは何についてでも話せるようになる必要があります。そうしなければ、失敗から学べません。耳を傾け、記憶し、コミュニケーションをとり、共感を覚える能力こそが、私たちが生き残るために必要なのです」

しかし、静寂にも美しさがあります。一部のジャーナリストや観客は、『枯れ葉』の中の沈黙の多さに注目しています。登場人物たちは、カラフルなカクテルを飲んだり、心地よい静けさの中でカラオケを聴いたりして沈黙を楽しんでいます。ポウスティもそうです。

「対話が少なければ、沈黙に耳を傾ければいいのです。それはとても特別なことです」

しかし、対話があれば、弱者に声を与えることもできます。トーベ・ヤンソンとアキ・カウリスマキは、世界的に有名なフィンランド人アーティストですが、この二人には共通点があるとポウスティは考えています。それは、二人とも物静かな人や内気な人たちの側に立ち、守っていることです。

「彼らの作品を通して、自分たちの声を聞いてもらえない生きものや人々の声を聞くことができるのです」と、彼女は言います。

そして、文化や芸術の力は言葉の壁を超えます。ポウスティは、閉まっている心の扉を開けるのに、音楽がいかに役立つかを語っています。若い頃はクラリネットを吹いており、今でも楽譜に親しんでいます。彼女はオペラのナレーションを担当し、『オレンダ』ではオペラ歌手を演じています。

- アルマ・ポウスティ(1981年生まれ)はヘルシンキ芸術大学で演技を学び、2007年に卒業。
- ポウスティはフィンランドのスウェーデン語を話すマイノリティに属している。ヘルシンキのスウェーデン劇場を中心に、フィンランド国立劇場やスウェーデンのさまざまな劇場で活躍。
- ポウスティは、フィンランド映画界の最高賞であるユッソ賞を2度受賞。
- 2023年、ポウスティはアキ・カウリスマキ監督の映画『枯れ葉』で主役を演じ、ゴールデングローブ賞主演女優賞にノミネートされた。
- 2015年からヘルシンキ地域交通のトラムやバスの停車案内アナウンスを担当。乗客にとって、ポウスティの声はなじみ深い。

アルマのインタビュー
動画を見る：



「音楽とダンスには、論理や理屈を超えた何か力があります。言葉や視覚的でないものは、想像力を養うために非常に重要です。特に私たちは視覚に支配された世界に生きていますから」

4. 普遍性 「勇気を持って自分の内面の奥底を探れば、作品は普遍的なものになります」

『枯れ葉』の上映会場では、皮肉のきいたセリフや、初デートで世界終末を描いたゾンビ映画を観る可



笑しさに観客の笑いが起きます。お腹がよじれるほどの爆笑ものではありませんが、繊細で、現実的なジョークなのです。そして人生は不条理なもの。

これはポウスティにとって初めのカウリスマキ作品です。監督は俳優たちに役作りの準備をあまりさせませんでしたが、彼女は自分の役柄とストーリーをカウリスマキ作品の連続性の中で理解したかったため、監督の過去の作品をすべて観なおしました。ポウスティはカウリスマキの描くフィンランドに同意しているのでしょうか？

「そうね、確かにあんな雰囲気のあるバーはありますよね」と、彼女は少し笑います。しかし、すぐに真剣な顔になって言います。

「ここにあいった人たちはいるし、沈黙もある。それに人間性、癖、弱さもある。そしてそれは恥ずべきことではなのです」

その代わり、この奇妙さと弱さをもって、文化は境界を越えられるのです。同じ言語を話したり、字幕を読んだりしなくても、喪失感を味わったり、恋に落ちたり、恥ずかしさを感じたりする登場人物に共感できます。

「勇気を持って自分の内面を深く探れば、作品は普遍的なものになります」と、ポウスティは言います。

すべての人を喜ばせようとしたら、すべての人に理解され好かれようとすると、あまり意味のない一般論になりがちです。

「ここフィンランドでは、カウリスマキの映画を見て、彼の私たちに描き方を気に入らない人もいるかもしれません。しかし彼がどれほど広く愛されているか、私たちは理解していないと思います。彼を理解し、同じ言葉を話す人はたくさんいます」 ■

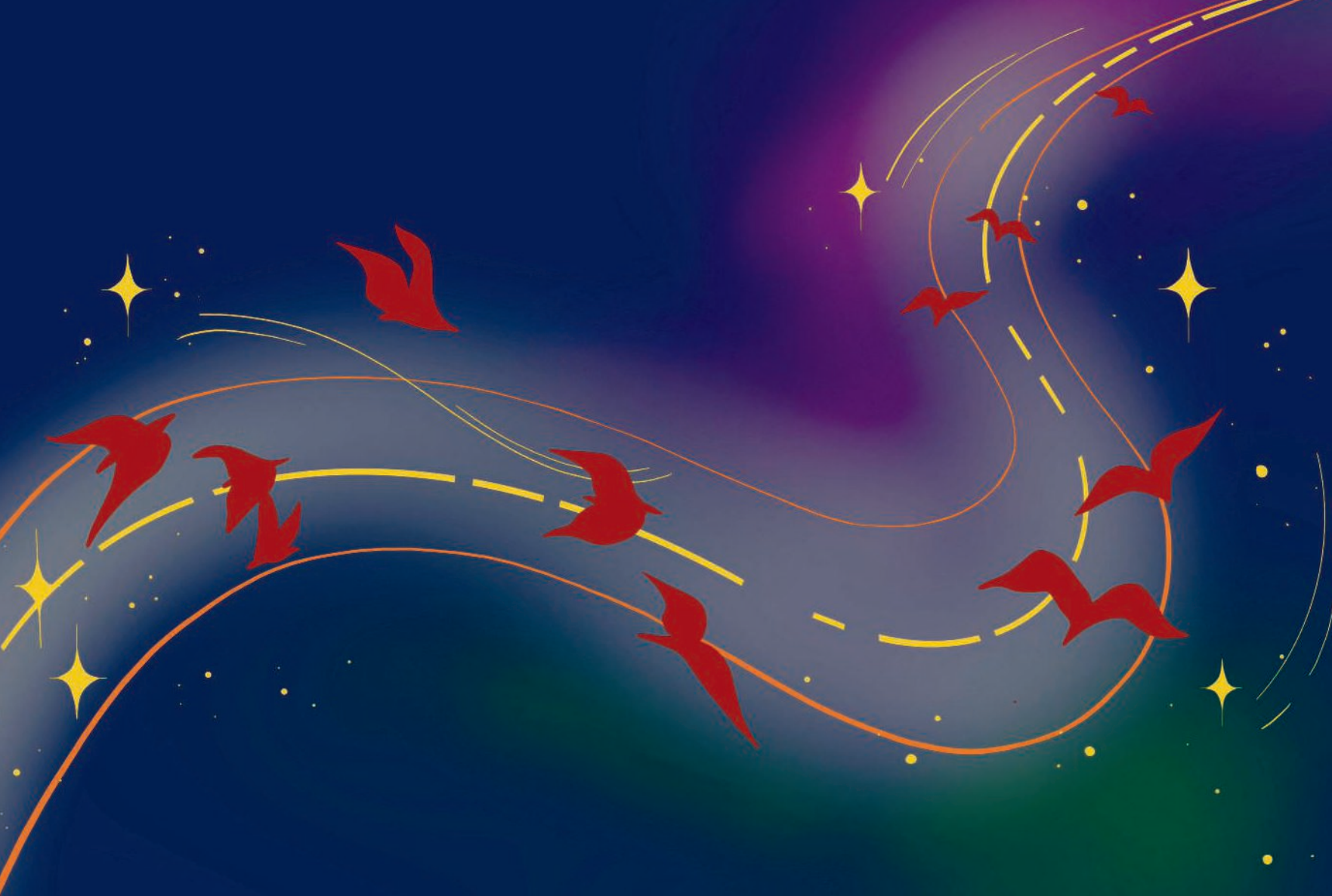
待ち望んだ オーロラの 最盛期が始まる

ソダンキュラ地球物理観測所は、人里離れた場所にある素朴な建物群に見えるかもしれませんが。まさにそこで、一流の科学者チームがオーロラの謎の解明に取り組んでいます。所長で宇宙物理学者のエイヤ・タンスカネンからオーロラハンターヘグッドニュース!活発なオーロラ活動期、今がその幕開けです。

木 造の建物に向かう路地にはマツの木が並んでいて、無塗装の伝統的な柵が、木々の後ろに四角い広場を形作っています。この辺りの多くの場所と違って、柵はトナカイの侵入を防ぐためではなく、人間の目には見えない何かを捕まえるために作られたようです。

建物の外観も質素なものです。ソダンキュラ地球物理観測所(SGO)では、世界中から集まった40名以上の科学者やエンジニアが働いています。彼らは、オーロラという、極地の暗い空でしか観測できないものを理解するために、共同で作業しています。

SGOのエイヤ・タンスカネン所長は、30年以上にわたってオーロラと大気中の磁気擾乱を研究してきました。



ソダンキュラはオーロラ研究に最適な条件を備えています、とエイヤ・タンスカネンは言います。

エイヤのインタビュー
動画を見る:



子どもの頃、彼女は雪の上に寝そべて、オーロラとはいったい何なのだろうと考えていました。ソダンキュラに来る前、彼女はNASAゴダード宇宙飛行センター(NASA/GSFC)などで、さまざまな研究、教育、管理職の仕事に携わってきました。

タンスカネンが研究を始めた初期から比べると、科学は大きく進歩し、私たち全員に恩恵をもたらしています。コンパスや飛行機といったナビゲーション技術の飛躍的な進歩は、磁場や擾乱に関する知識が増えたおかげで可能になったのです。

「今では大気のことをよく理解できるようになりました」と、タンスカネンは語ります。

オーロラを理解することは、磁場を理解することと密接な関係があります。オーロラは、太陽風が磁気嵐を地球に運ぶときに地上から約100キロ離れた大気圏上層部で

発生します。オーロラの光は地球の磁場に沿って現れ、北半球ではオーロラ・ボレアリス(北極光)、南半球ではオーロラ・オーストラリス(南極光)と呼ばれています。

鳥は何を見ているのか？

タンスカネンは観測所の外の砂利道を散歩するとき、顔を空に向けて、じっと見つめ続けます。宇宙へのまなざし。それが幼い頃からの変わらぬ姿勢です。

博士論文では、太陽のエネルギー収支 — つまりもっと実際の彼女の言い方を借りれば、「オーロラはどこからエネルギーを得ているのか」について研究しました。

北極圏の境界から北へ120キロ、フィンランドのラップランドに位置するソダンキュラ観測所は1914年以来、地球物理学の科学測定の拠点として活用されてきました。

観測所は現在、オウル大学の独立した研究部門となっています。

開設当初から、ここでは地球の磁場が測定されてきました。

「飛行機やコンパスなど、ナビゲーションや方向に関係するものはすべて、磁場の測定に基づいているのです」と、タンスカネンは言います。

磁極とは磁場が垂直に向いている場所のことで、地球には北極と南極の2つの磁極があります。オーロラが人間の目に見えるのは、太陽嵐が地球の磁極付近にぶつかったときだけです。渡り鳥はこの磁場をナビゲーションに利用しています。人間にとっての道路のように、渡り鳥には磁場が見えるのです。

極地探検を前に

地球物理学界にはひとつ問題があります。磁極の位置は常に移動しており、正確な地理的位置は現在わからないことです。磁極は地理的な極と同じではなく、現時点では約500キロ離れているはずです。

渡り鳥は磁場をナビゲーションに利用しています。人間にとっての道路のように、渡り鳥には磁場が見えるのです。

磁極の位置に関する知識が不十分なため、特に極地付近ではナビゲーションの位置が不正確になります。

「北磁極は前世紀末にカナダ群島を離れ、北極海のどこかでシベリア方向に動いていることは分かっています」と、タンスカネンは言います。

この問題の解決策は、さまざまの磁極を探しに行くことです。2025年9月、地球の北磁極点を探すため、極地探検隊が北極海の未知の場所に向かってソダンキュラから旅を始めます。

同様の旅が南極側でも2026年2月に行われる予定です。

「探検隊は極点がどこにある

のかも、どんな状況になるのかも知りません」。

探検隊が極点に到達するには、スキーや泳ぐことが必要かもしれませんが、さらに難しいのは、極の正確な位置に到達するだけでは十分ではないことです。探検隊は世界の果てから、どうにかしてその位置を世界中に知らせなければならないのです。

「どうなるかはまだわかりません」と、タンスカネンは語ります。

それでも確かなことは、この遠征のための最重要装備は、ソダンキュラで作られるということです。磁極の正確な位置を指し示す特殊な球状のコンパスもそのひとつです。

宇宙とつながっている

観測所の周りには、磁場のマグニチュード(規模)、強さ、方向を測定する磁力計が設置された赤い小屋があります。この小屋がソダンキュラを世界とつなぎます。

「実際には全宇宙とつなぎますね」と、タンスカネンは訂正します。

ここでは、夏は日が沈むことなく、冬は日照時間が数時間しかありません。このような極端な光条件により、ソダンキュラとラップランド地方はオーロラを見たい人々にとって最高の、地球物理学研究にとっても理想的な場所となっています。

「なぜこんな人里離れた場所で科学をやりたいのかとよく聞かれます。この種の科学は、自然の声が人間の声よりも大きく聞こえるような場所でやらなければならないから、と答えています」と、タンスカネンは語ります。

当たり年が続く

オーロラ鑑賞を夢見るすべての人に朗報です。タンスカネンによれば、オーロラの出現頻度は2025年以降2028年まで増加します。

それは太陽の顔が「怒り」に変わるからです。実際よりも不吉に聞こえますね、とタンスカネンは説明します。

太陽の周期が、太陽表面に大きな黒点ができる時期に達しました。一つの黒点は木星ほどの大きさがあります。

「太陽放射は周期的です。最も一般的に知られている周期は11年で、22年の周期もあります。太陽の北極と南極は11年ごとに場所を変え、22年ごとに北が北に、南が南になります」。

タンスカネンが写真を見せて説明します: 各周期の開始時、太陽はだいたい均一な黄色です。周期の4〜5年目には、表面に小さな点がたくさんできます。

ラップランド地域の学校が独自のオーロラカメラを設置

宇宙飛行士が宇宙からオーロラを見ると、地球の北磁極と南磁極を蛇のように動く緑色の「尾」が見えます。

このような種類の画像が、ソダンキュラ地球物理観測所(SGO)のデータコレクションには欠けていました。しかし、エイヤ・タンスカネン所長はあるアイデアを思いつきました。ラップランド地方のあちこちにオーロラカメラがあれば、それらのカメラで撮影した画像を組み合わせて、宇宙から撮影した画像と同じくらい広大で包括的な1枚の画像にすることができます。この画像のおかげで、私たちはオーロラをより深く理解できるようになりました。

今ではラップランド東部と最北部にある15の高校すべての校庭に、特別なSKY-I自動タイムラプスカメラが空に向けて設置されています。これらのカメラは、オーロラやその他の夜空の現象を観測して撮影し、その写真をSGOに送っています。

生徒たちは定期的にカメラの撮影内容をチェックし、収集されたデータの理解を深め、オーロラを物理の学習に取り入れています。さらに正確な写真を撮るために、ラップランド西部の高校、そしておそらくスウェーデン側のラップランド地域の高校にもSKY-Iカメラが設置される予定です。

「この種の科学は、自然の声が人間の声よりも大きく聞こえるような場所でやらなければならないのです」

「鍋でお湯が沸騰する直前、鍋底にたくさんの小さな泡が見えるのと似ています」と、彼女は続けます。

2025年はこの段階に来ています。太陽は沸騰しようとしており、小さな黒点は泡立ち、太陽からはじけ出るものもあります。その黒点が大気や北極・南極付近の地球の磁場にぶつかると、オーロラが出現するのです。

2025年のオーロラはむしろシンプルで緑色になるはずで

す。2026年から2028年頃、つまり太陽周期の6〜7年目の間に、黒点の数はピークに達します。

嵐が本当に始まるのはそのときです、とタンスカネンは言います。「太陽が怒った顔をしている、と言うのがこの時です。しかめ面をしているように見えます。この時点で、オーロラはさらに増え、赤や青など、より複雑な形や色になります」

写真: Getty Images



注目すべきフィンランドの宇宙技術・探査企業

Huld

欧州宇宙機関(ESA)が主導する最も困難な宇宙ミッションのためのソフトウェア開発で30年以上の経験を持つ技術・設計企業です。

ICEYE

合成開口レーダー(SAR)衛星コンステレーションは、自然災害への対応と復旧、安全保障、海上監視、保険、金融などの分野に情報を提供できます。

Kuva Space

広範なハイパースペクトル衛星クラスターを構築し、高度なAIを使用して、顧客にほぼリアルタイムで宇宙からの情報を提供します。

ReOrbit

ソフトウェア定義衛星を提供しています。どの軌道でも柔軟でタイムリーなミッションが行えるよう、すぐに使える宇宙システムとアビオニクスを提供しています。

Solar Foods

私たちが呼吸する空気からソレインという万能タンパク質を生産します。Solar Foodsは2024年、長期の宇宙ミッションで宇宙飛行士に食事を提供する技術革新を模索中のNASAの宇宙食コンテスト「ディープ・スペース・フード・チャレンジ」の国際部門で優勝しました。



オーロラを見るには

いつ? オーロラが人間の目に見えるのは、空が暗く、雲ひとつない晴天のときだけです。フィンランドのラップランドでは、8月下旬から4月上旬まで見られます。

どこで? 北の空に障害物がない場所を選びます。周囲に明かりがある場合は、それが自分の後方の南側にあることを確認します。冬期、ラップランドでは日照時間が短く、オーロラを見るには絶好の場所です。

本当にオーロラだと見分ける方法は? SNSにはカラフルなオーロラの写真があふれていますが、最も一般的な色は薄緑色で、雲と混同しやすいです。しかし、オーロラは雲よりも速く、不規則に動きます。

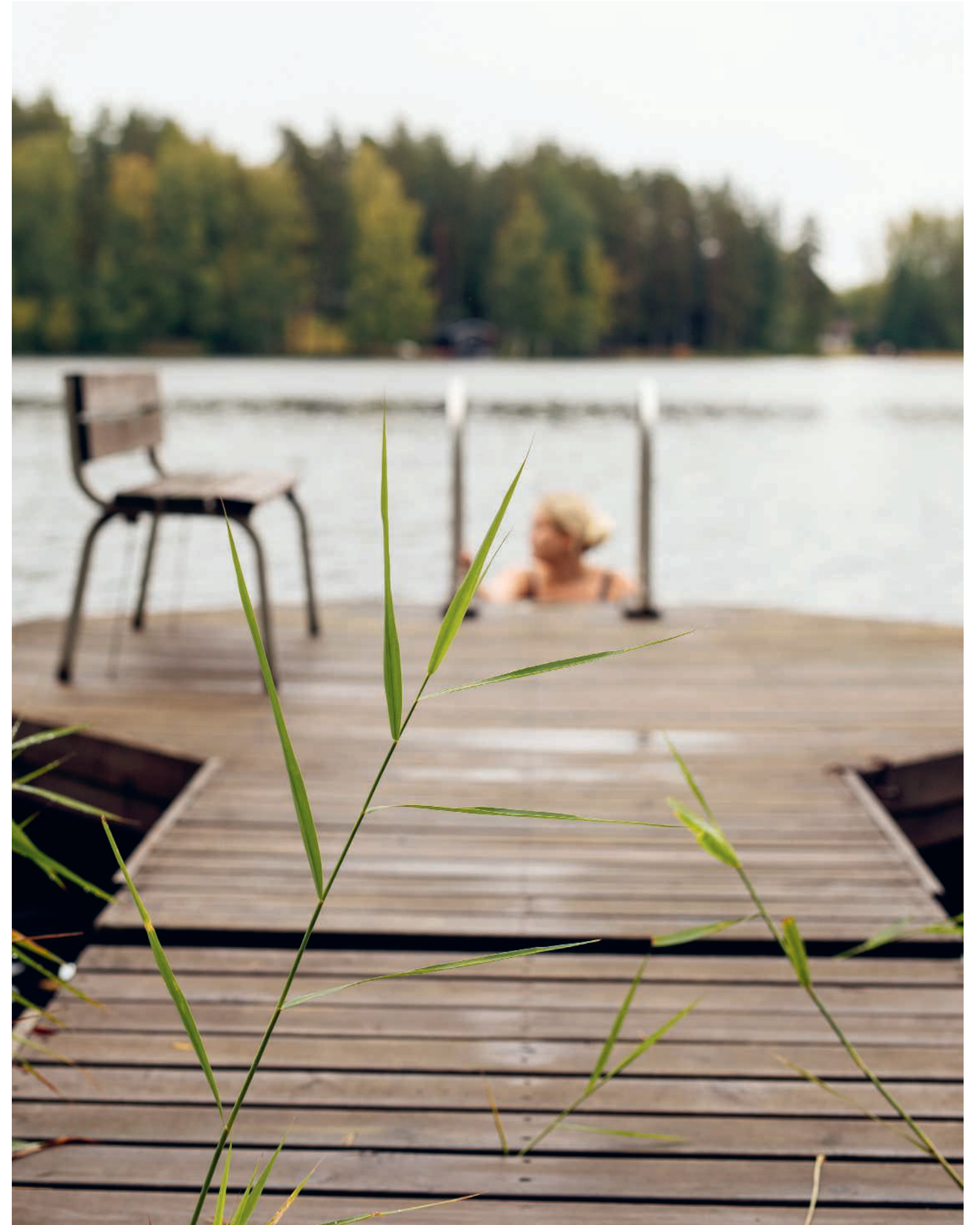
オーロラをカメラに収める方法は? オーロラはスマートフォンでも撮影できます。ISO感度を例えば800〜1600に調整し、シャッター速度を数秒に設定することを忘れずに。現代のカメラレンズは人間の目よりもオーロラがよく見えるので、実際に自分の目では見えないオーロラの写真を撮ることができます。■

「私にとってここは 神聖な場所」



フィンランドでは、ほぼすべての建物にサウナがあります。3人のサウナ愛好家が、お気に入りのサウナの魅力を語ります。

TEXT NINNI LEHTNIEMI PHOTOGRAPHY HELI BLÅFIELD



ネア・マンテュ(24歳)学生
ヴィヒティのミュツリランピ湖沿いにある
1950年代のコテージ・サウナ

湖畔のコテージでは毎日サウナに入ります。家族のコテージ・ライフには欠かせないことです。小さなサウナですがとても効率的。30分で温まり、5人入れます。

街で過ごしているときは、週に一度はサウナに入るようにしています。電気式のサウナもいいですが、こんなふうに薪で温めるサウナに勝るものはありません。自分で火をつけ、薪をくべると、ロウリュ(サウナの蒸気)の感じ方も違ってきます。私の親友もサウナの愛好家です。彼女が訪ねてくると、いつも身体を洗う水を温める火をおこしてくれて、私はキウアス(サウナストーブ)の火の番をします。そんな流れがいつものパターンになっています。

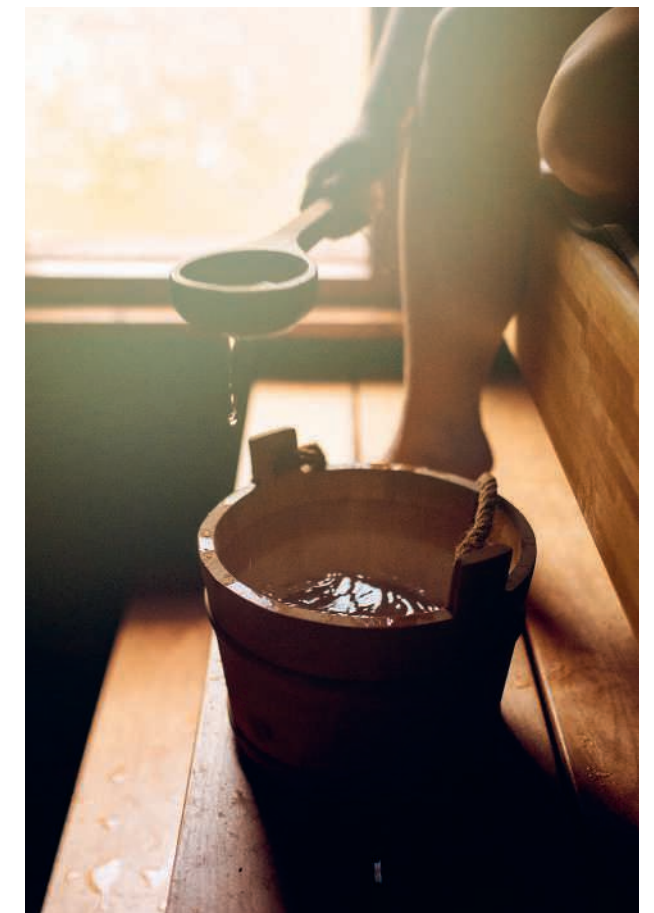
サウナアロマを好まない人もいるかもしれませんが、母と私は、とくに冬に向けて日が暗くなるときに使っています。ロウリュの水に木のタールやユーカリの香りを一滴垂らすと、素敵な雰囲気になります。

熱したサウナストーンに水をかけて、蒸気を背中を感じるのが好きです。それから湖で泳ぎ、これを5回ほど繰り返します。水泳は、ストレスが溜まっているときの気分転換に最高です。

私にとってここは神聖な場所です。私が子どもの頃、母は私たちがサウナで行儀よくできるようサウナトントゥ(サウナの妖精)の話聞かせてくれました。行儀よくしないと、サウナトントゥを怒らせてしまうと。大人になってからは、サウナトントゥのことは気にしなくなりました。でも、サウナで友人と話しているときに下品な言葉を口にしてしまったら、すぐに自分を戒めます。みんなのサウナでの平穏を保つことが重要なんです」



「自分で火をつけ、薪をくべると、
ロウリュに対する感じ方も
違ってきます」



アリ・ヨハンソン(68歳) 年金生活者
フィンランド最古の公共サウナ、
タンペレ市のラヤボルッティ・サウナ

「ラヤボルッティに通い始めて68年になります。赤ん坊の頃は母親に連れられて女性のほうに入り、もう少し大きくなったら父親と一緒に男性のほうに行きました。ラヤボルッティが改修工事で閉鎖された期間以外は、他の公衆サウナには行ったことがありません。

当時、周辺のビスパラ地区の住民はとても狭いアパートに暮らしていて、家に入浴設備がなかったため、公衆サウナは彼らにとって必要不可欠な存在でした。今では、人々がリラックスするために訪れる場所になりました。ラヤボルッティの秘密は、湿度と熱の絶妙なバランスにあります。

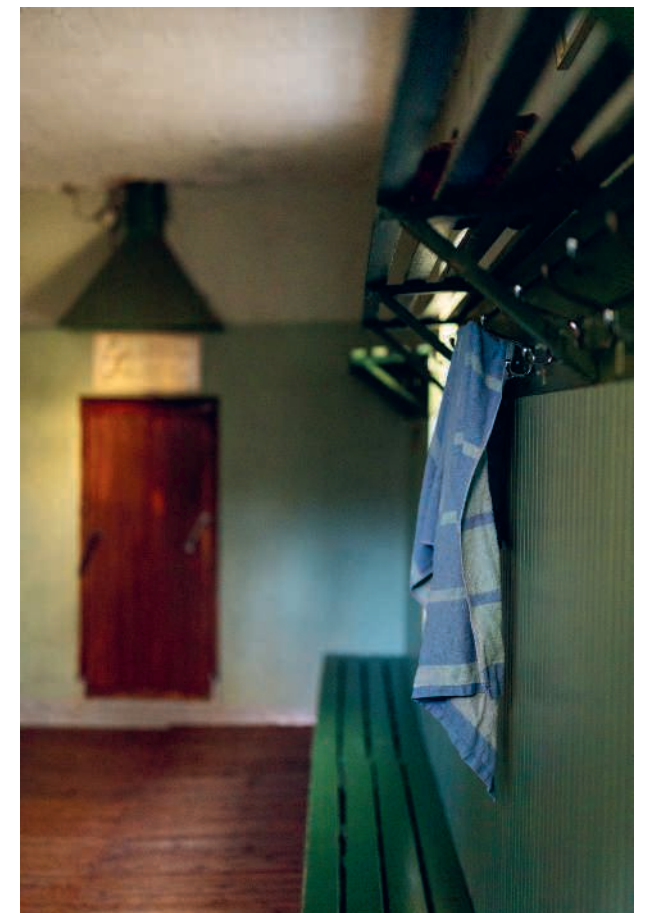
1989年、タンペレ市はサウナを駐車場にする都市計画を考えていました。これに対抗し、サウナ利用者たちはラヤボルッティ・サウナ協会を設立、自分たちでサウナ運営を始めたいと市に伝えました。一笑に付されましたが、1年間運営を試す許可を与えられたのです。それが今や、ラヤボルッティは世界中から観光客が訪れる人気スポットになりました。

ラヤボルッティのような公衆サウナは、地域社会との結びつきが非常に強く、体を洗うだけでなく心も浄化されるのです。ラヤボルッティのサウナは男女別になっており、それぞれでおしゃべりが楽しめます。屋外にはクールダウンするための共有エリアがあります。そこでまた新たなおしゃべりが始まります。話題はたいていスポーツや最近の出来事など。サウナでは誰の感情も傷つけないために政治の議論は避けています」

アリのインタビュー動画を見る:



「ラヤボルッティのような公衆サウナは、地域社会との結びつきが非常に強く、体だけでなく心も洗われ浄化されるのです」



タブ・ハロ (56歳) コピーライター エスポーにあるマンションの共同サウナ

このサウナの一番よいところは、素晴らしい眺めです。テラスからはハルマヤ灯台が見え、晴れた日には海越しにエストニアのタリンまで見渡せます。

マンションの共同サウナは従来自然光があまり入らない地下に設置されていました。最近特に新築物件では、このような屋上サウナの人気が高まっています。

子どもが生まれてから、いつも金曜日の午後6時に家族でサウナを予約しています。息子たちは16歳と14歳になりましたが、金曜サウナは今でも恒例の行事です。これはうちの家族の唯一の恒例行事だと思います。週末は金曜サウナから始まるのです。オフィスからの退勤後、同僚との飲み会を断る理由としても最適ですね。金曜サウナで一週間の仕事の疲れを癒し、夕食を作る前に家族でリラックスします。

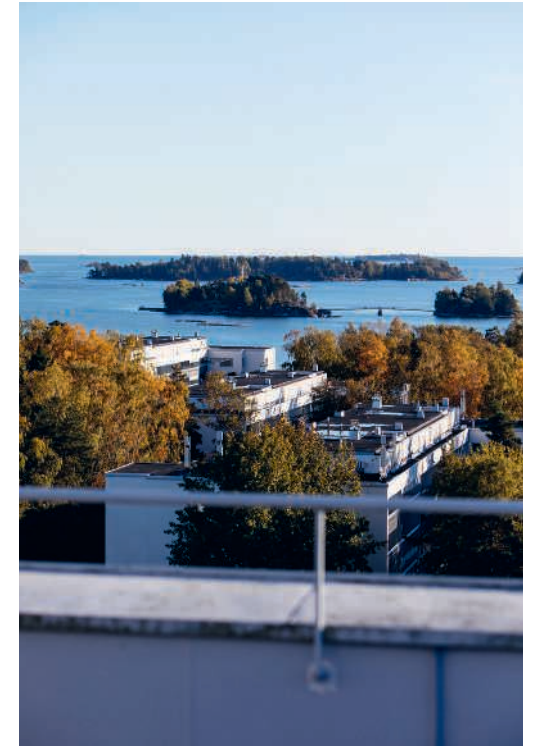
息子たちが小さかった頃は、じっと座ってられず、金曜サウナはかなり慌ただしいものでした。退屈しないよう、脱衣所にはお風呂用のおもちゃやジュース、お菓子も用意していました。今では、家族全員がサウナでの平穏と静けさを楽しめるようになりました。また、いつも4人同時にサウナに入るとは限りません。

マンションの共同サウナは素晴らしい発明です。若い頃は、友達が住んでいる場所の共同サウナを訪ね歩いたりしたものです。すべてではありませんでしたが、いくつか素晴らしいサウナもありました。ヘルシンキ中心部で部屋をシェアしていた友人グループの共同サウナにはプールまでありました。

1980～90年代には、20平方メートルのワンルームマンションにさえ個室サウナが作られていましたが、これは意味がありませんでした。そしてその後、共同サウナが復活したのです。共同サウナを作って維持することは、資産的な価値とまではいかなくても、少なくとも住宅の社会的価値を高める素晴らしい方法です」■



「子どもが生まれてから、毎週
金曜日の午後6時に家族でサウナを
予約しています。息子たちは16歳と
14歳になりましたが、金曜サウナは
今でも家族の恒例行事です」





賑やかな図書館

読書犬から3Dプリンターまで、フィンランドの図書館は学習と情報の拠点として新たな役割を果たしています。フィンランドの図書館で可能なアクティビティをいくつか紹介しましょう。

TEXT TAINA AHTELA

すべての人に音楽を

What?音楽&録音スタジオ

Why?ビートルズが録音したロンドンのアビー・ロード・スタジオに行くレベルではない?心配ご無用!フィンランドなら無料でレコーディングを始められます。フィンランドの図書館には、演奏、録音、ミキシングに使える音楽スタジオがあり、なかにはミキシングやマスタリングのワークショップを開催しているところもあります。ほとんどのスタジオには、ギター、ドラム、ピアノなど、アコースティックと電子楽器両方が揃っています。公立図書館に練習スペースがあれば、もうガレージなんて必要ありませんね。

古き良きビートルズのアルバムを聴いて大切にしたいければ、多くの図書館がLPレコードやカセットテープ、VHSテープを聴いたりデジタル化したりするためのツールを提供しています。

チェスからスペースインベーダーまで

What?ゲームとゲームルーム

Why?フィンランドは、欧州最大かつ最もゲームが盛んな国のひとつ。そのためフィンランドの人たちが、図書館でも真剣にゲームに取り組むのは意外なことではありません。フィンランドの図書館には、伝統的なボードゲームからデジタルゲーム、ゲーム機まで幅広い種類のゲームがあり、遊ぶスペースも用意されています。

ヘルシンキ中央図書館オーディ(Oodi)のロビーに行けば、いつでもチェスに興じる老若男女を見かけます。ゲームをしたくても一緒にプレーする人がいない場合は、いくつかの図書館が主催しているゲームクラブに参加しましょう。

ゲームも本と同じように図書館カードで借りて持ち帰ることができます。また、最新ゲームだけでなく、1970年代のレトロゲームも用意されています。

物語を紡ぐ

What?ブッククラブと編み物クラブの出会い

Why?研究によると、手仕事は脳のいろいろな部分を刺激し、良い効果をもたらします。多くの人が思っていることに反して、私たちの思考は脳内だけで起きているわけではありません。「身体化された認知」と呼ばれるものもあります。手を使って仕事することで、私たちは注意深くなったり、リラックスしたりできます。いずれにせよ、何かを手作りすることは、物語を聴くことと完璧な組み合わせです。

Novellikoukkuは直訳すると「小説フック」。短編小説の朗読を聴きながら、かぎ針編み、棒針編み、その他の手芸をするために人々が集まるクラブのことです。心が落ち着くような雰囲気の中で行われるイベントで、多くのフィンランド人が居心地の良さを感じています。しかも、手先が器用でなくても参加できます!図書館が子どもと大人の両方に提供している他のいくつかの朗読会も同様です。



クリエイター歓迎!

What?3Dプリンター

Why?3Dプリントは、ドールハウス用の細かいパーツ、プロトタイプ、プラスチック製の足りない部分など、必要なものを作るのに便利な方法です。さらに3Dモデリングのような新しいデジタル技術スキルを、楽しくさりげなく学べます。

フィンランドでは多くの図書館に、3Dプリンターを備えたワークショップやメイカースペースがあり、無料で利用できます。必要なのは、自分のデザインをUSBメモリに入れて持参し(モデルはオンラインで無料ダウンロード可能)、あとは無害な生分解性PLA樹脂を使ってマシンでプリントするだけです。図書館のスタッフが、他のデジタル作業と同様、プリントもサポートしてくれます。

図書館のワークショップにはたいてい、ミシン、ビニールカッター、レーザーカッター、ラミネーターなどの設備もあります。



大胆で美しく

What?建築賞に輝く図書館

Why?フィンランドで最も有名な建築のいくつかが図書館というのは、とてもフィンランドらしい現象です。図書館は、フィンランド社会において、最も貴重な基盤の一部である教育、読み書き能力と文化を大切にする公共スペースなのです。

ヘルシンキ、トゥルク、タンペレの市立図書館は、建築ファンなら必ず訪れたい場所。このほか南部の町キルッコヌンミにあるフーリ図書館のように、フィンランドを代表する建築家の設計で建築賞に輝く図書館が、小さな町にあったりします。

ラップランドには、フィンランド・モダニズムの巨匠アルヴァ・アアルトが1960年代に設計したロヴァニエミ図書館があります。さらに歴史をさかのぼると、19世紀にC.L.エンゲルによって建てられた国立図書館は、ヘルシンキ中心部の賑やかな大学キャンパスにありながら、静かで落ち着ける隠れた名所です。



犬に読み聞かせる

What?読書犬

Why?図書館犬、あるいは読書犬には「寄り添う」という重要な仕事があります。犬は、人間、主に子どもたちが読み聞かせるのを聞いています。犬は、読むのが遅いと批判したり、コメントしたり、間違いを訂正したりしません。研究によると、犬に読み聞かせをするとストレスが解消され、読書がスムーズになり、理解力が高まります。これは、読書に困難をかかえる人にはとくに有効です。

図書館犬は、慎重に選抜・訓練されていて、飼い主のボランティアによって活動しています。図書館に初めて読書犬が入るようになったのは2011年のこと。今では図書館内ではないものの、読書ポニーや読書牛もいます。

ボランティアとしては、その他にも「読書おじいちゃん・おばあちゃん」や、打ち解けた雰囲気の中でフィンランド語や他の言語を話す練習ができる会話グループ「ランゲージ・カフェ」といったアクティビティがあります。■

地元の食材 だけを使って

シェフのレミ・トレムイユが故郷の東フィンランドに戻ったとき、強い地域コミュニティの重要性に気づきました。彼のレストランで使う食材はすべて近隣の生産者から仕入れたもので、シェフ自身も驚くメニューが生まれることもあります。

TEXT LOTTI HEIKKERI PHOTOGRAPHY TIMO VILLANEN

「松ぼっくりと牛乳」。昨年、レストラン「ソリタリー (Solitary)」のメニューにはそう書かれていました。

シェフのレミ・トレムイユが数年前に初めて自分のレストランを開業したとき、明確な目標がありました。フィンランドの伝統食材から刺激的で斬新な料理を生み出すこと、可能な限り身近な所で食材を調達すること、そのときに手に入るものを中心に、メニューを頻繁に変えることでした。

こうした目標が実を結び、小さな街ランタサルミに、世界的に高く評価される高級レストランが誕生しました。トレムイユのチームは、ベテランシェフでさえも驚くような食材を使った料理を創作するようになりました。

「レストランをオープンしてみても、世の中にどれだけ多くの食材があるのかが本当によくわかりました。でも、松ぼっくりがこれまでで一番の驚きでした」

松ぼっくりの砂糖漬けと自家製モッツアレラチーズに早摘みの緑のイチゴを添えた一品は、瞬く間に人気メニューになりました。店のコンセプトに忠実に、メニューに載ったのが短期間だったにもかかわらず、1年以上経った今でもこの料理を求めるお客さんがいます。このレ

ストランを10回以上訪れている中欧のカップルからは、次回訪ねる時にまた松ぼっくりを食べられるかとの問い合わせがトレムイユに寄せられました。

「冷凍庫には、特別ゲストのために松ぼっくりを10個ほど準備しているんです」と、彼は明かします。

突然の帰郷

フィンランド東部の南サヴォ地方にある人口約3000人の町でレストランを始めるのは、トレムイユの当初の計画ではありませんでした。子ども時代、彼はランタサルミの街を離れるのが待ち遠しかったのです。学校をやめ、レストランで働き始め、ヘルシンキに移り住み、ミシュランスター獲得レストランで修行し、少しずつシェフとしての階段を上がって行きました。何年もの間、彼はオーストラリアとバリ島に住み、仕事をしていました。

ところが新型コロナウイルスの感染拡大によって高級レストランが

「1週間に6回もメニューを変えなければならなかったこともあります。正直言って、理想的ではありませんでした」

閉鎖され、トレムイユは職を失いました。そんな折に最初の上司だったマルクス・ヘイスカネンから電話がかかってきました。ランタサルミに建設中の豪華リゾート「クル」で、トレムイユが働きたいか尋ねてきたのです。

「ヘルシンキで生まれ育った妻のラウラにランタサルミに引っ越してもいいかと尋ねたら、承諾してくれたので、私たちは今ここにいます」

自分のレストランを始めるために故郷に戻るということは、自分のルーツに戻ることを意味します。

フランス人の父とフィンランド人の母を持つトレムイユはフランスで生まれ、ランタサルミで育ちました。祖父と湖で釣りをしたり、祖母と郷土料理を作ったりしたのが、子供時代の一番の思い出です。小さな街に戻り、自分の家庭をもつことは正しいことだと感じました。

「私がランタサルミを離れたのは、当時、一番近くて美味しいレストランがヘルシンキにあったからです。今ではラップランドに至るまで、フィンランド全土に素晴らしいレストランがあります」

「ソリタリー」の開店は、フィンランドの伝統食材に新たなアプローチをすることでもありました。このレストランの中核となる考えは、地



シェフのレミ・トレムイユは、すべての食材を地元産にすることが最高品質の食材を確保する最善の方法だと信じています。



入手可能な季節の食材にこだわっているため、「ソリタリー」のメニューには何が出てくるか決まっています。

元の農家、漁師、猟師、生産者から食材の全てを調達することで。 「ソリタリー」のスタッフも自らレストランの外にある野草を摘み、シェフの一人で熱心な猟師でもあるサムリ・クロネンが獲ってきた野ウサギもメニューにのびります。

旬のもの、手に入るものは何でも使うという姿勢は、メニューに何が並ぶか事前にはわからないことを意味します。この点が、他の多くのレストランとは一線を画しています。一部のレストランでは、季節を通じて決まった料理をメニューに載せるため「地元産」と称する食材が遠方から調達されることもあるのです。

「ここでは、いま手元にあるものでやりくりします。湖の氷が薄すぎて、地元の漁師が氷の穴を使って網を投げ入れることができれば、その週のメニューに魚は出します」と、トレムイユは説明します。

このやり方はチャンスであると同時に挑戦でもあります。トレムイユと彼のチームがクリエイティブで臨機応変にならざるを得ない一方で、時には少しプレッシャーを感じることもあります。

「1週間に6回もメニューを変えなければならなかったこともありましたが、正直言って、理想的ではありませんでした」と、トレムイユは笑います。

村を巻き込む

コンセプト実現のために、トレムイユは地元の人々との強いつながりを作る必要がありました。ネットワークの構築には多くの時間と労力を要しましたが、今や「ソリタリー」はこの地域の多くの生産者にとって最大の取引先であると、トレムイユは誇らしげに語ります。

オートクイジーヌに地元の食材を使う影響は、単にレストランのサプライチェーンにとどまりません。

「伝統的な食材を使い、少しおしゃれなものを作ることで、その食材の普及に一役買えればと思います」

**「私たちの成功を願
い、その名を広めよう
とする3,000人以上のア
ンバサダーがここに
います」**

ます。その結果、地元の生産が発展し、雇用が創出されます。トリクルダウン（徐々にしたたり落ちる）効果が大きな意味を持ち得るのです」

トレムイユは、すべての食材を地元産にすることが最高品質の食材を確保する最善の方法だと信じています。トレムイユが常にファーストネームで呼びあう仲の生産者たちは、レストランに納品するすべてのものが可能な限り新鮮であるように全力を注いでいます。地元の人々と密接に協力することで、柔軟性も増します。先日家族と留守にしていた週末に、農家が採れたてのミニトマトをトレムイユの車庫に置いてきました。

「原材料を卸業者経由で調達していたら、このようなことは起きないでしょう」

レストランが有名になり理念が広まるにつれ、地元の人々が自発的に農産物を提供するようになりました。例えば今、レストランにはプラムの亜種であるダムソンが40リットルもあります。

「幼なじみの両親が持ってきてくれたんです。今年は大豊作で、家

族用にはもうこれ以上いらさないからと言っていました。そこで私に使用したいか聞いてきたんです。ダムソンは私にとってまったく新しい食材です。今週のメニューはすでに決めていたのですが、これから何か考えなければいけません」

レストランは、地域社会の意識も育てています。住民たちはトレムイユと話すために店にやってきて、観光客にも宣伝してくれます。

「地元の人たちは私たちのレストランをとても誇りに思っています。私たちの成功を願い、その名を広めようとする3,000人以上のアンバサダーがここにいます」

何年も大都市で暮らした後、トレムイユはランタサルミで仕事と家庭のベストバランスを見つけました。ここで彼は、自然と地元食材への愛と感謝の気持ちを子どもたちに伝えることができます。

「私たちは多くの時間を外で過ごし、自然を探索します。子どもたちを地元の羊牧場に連れて行ったこともあり、食べ物はどこから来るのか、もっとよく理解するようになっていきます。■

レミが選ぶ季節ごとの最高の味



冬 ジャガイモやビーツなどの根菜類は、多くの料理の基本。野ウサギの狩猟シーズンが続きます。淡水のタラは冬の魚として最高の選択肢。



春 イラクサなどの野生のハーブや、さまざまな木の芽を使う季節。早生のジャガイモや初物野菜が美味。

季節の変わり目いつも美味しく、面白い食材が見つかります。例えば、夏の終わから秋にかけては、ザリガニが旬。

秋 初秋は果物、野菜、キノコが豊富。秋はまた、ヘラジカやシカ、多くの野鳥の狩猟シーズンの始まり。



夏 食の風味が最もさっぱりしていてピュア。魚の中でも特に地元サヴォ地方産のムイック（モトコクチマス）が最高。野草もたくさん使用。





タピオ (Tapio) レストランはヨハンナ・モウルヤルヴィとコナー・レイボーンが経営しています。昨年、タピオはミシュラン・スターを獲得した最北のレストランとなりました。

自然のエッセンスを感じる一皿

フィンランドの自然を味わえる
おすすめレストランを紹介します。



ノッラ (Nolla ヘルシンキ) このゼロ・ウェイストのレストランでは、年間を通して地元産のオーガニック食材を中心としたメニューを提供しています。旬のフィンランド産食材を使いながら、創業者たちのルーツである南欧の伝統料理と融合させています。

シェフのエーリク・マンシッカとシモ・ライシオ
はトゥルク周辺の森や群島で食材を集めます。



ヴォール (Vår ポルヴォー) 伝統を大切にしながら、遊び心を加えた現代的フィンランド料理を提供しています。地元の新鮮な食材を使い、天然魚、野菜、フィンランドの最高級乳製品をメニューの基本としています。



グロン (Grön ヘルシンキ) 都会にありながら、自分たちの畑で採れた野菜や青物を提供しています。



アーナール (Aanaar イナリ) このレストランでは、地衣類やサーミの伝統的なハーブ、アンゼリカ、トナカイの肉やイナリ湖の魚など、あらゆるものを使ってラップランドならではの料理を創作しています。



ニーニプー (Niinipuu オッコラ・ホリデーリゾート) レストランがあるのはフィンランド最大の湖、サイマー湖に浮かぶ島の古い納屋。地元産の魚を使ったメニューが豊富なのが特徴です。



ノッカ (Nokka ヘルシンキ) オーナーシェフのアリ・ルオホは、最高の食材を集めるため、自ら農作物の収穫や狩猟、漁をします。名物メニューのひとつは地元産の海藻です。



カスキス (Kaskis トウルク) シェフのエーリク・マンシッカとシモ・ライシオはトゥルク周辺の森や群島で食材を集めます。メニューには常に形を変えて野生のハーブが登場します。



ショード (Skörd ヘルシンキ) すべての食材と飲料をフィンランドの生産者から仕入れています。ショードのメニューには、手摘みの野生ハーブやベリーのほか、ジビエ、魚、生態系に配慮して飼育された仔羊肉が並びます。



ヘルシンキのシベリウスモニュメントの隣にある子どもの遊び場には、音楽を奏するためのスチール製楽器があります。ケイステリが気に入っている場所のひとつです。

チームのインタビュー動画を見る:



NO RULES 創造的探求に ルールなし

チーム・ケイステリの家族は、4歳だろうが40歳だろうが、誰もがアーティスト。父と息子は一緒に創造性を発揮し、フィンランドの活気ある子ども向けのカルチャーシーンを探求します。

TEXT LOTTA HEIKKERI PHOTOGRAPHY SABRINA BQAIN

2024年の春、ヨーロッパのテレビ視聴者は、口ひげを生やし、カーリーブロンドのマレットヘアにデニムのショートパンツ姿で登場した男性に夢中になりました。

そんな彼が、欧州最大の音楽の祭典「ユーロビジョン・ソング・コンテスト」で「No rules! (ルールに縛られない!)」と歌いながら、無限のエネルギーを放って踊ったのです。

自分のやりたいようにやり、作り上げられた境界線を見捨てること。それがWindows95Manのモットーで、このキャラクターを演じるアーティスト自身のモットーでもあります。

チーム・ケイステリは、芸術表現に関してルールに縛られないアーティストです。写真家、画家、アニメーター、画商、DJ、ミュージシャンと何でもこなします。アートシーンでは、遊び心あふれる絵画や壁画、服に描かれた黄色い大きなお尻のキャラクター「ウッケリ」で知られています。

ケイステリの子どもの時代の一番の思い出は、わずか5歳から参加したアート教室です。先生からは、芸術の自由と探求を楽しむよう励まされました。

「彼女は、『チーム、絵を描くときは消しゴムを使わなくてもいいのよ。間違いないんだから』と

言ったんです。そう言われたことにすごく興奮したのを覚えています」彼は今4歳になる息子にも、同じように創造的で境界を見捨てる精神をもつように励ましています。

「子どもたちのために、多くのアクティビティが用意されています。たいていは無料で」

心に残る経験

ケイステリのクリエイティブな才能は、幼少期から育まれてきました。エンジニアの両親は、幼い頃から子どもたちをアートショーや文化イベントに連れて行きました。

誰もが参加できる年に一度の文化の祭典「Night of the Arts」の期間中、ヘルシンキのトーロ湾を歩いて感じた畏敬の念を、ケイステリは今でも覚えています。人々、アート作品、そしてミュージシャンが浮かんだステージの上で演奏する子ども向け音楽が、夏の夜に入り混じっていました。

「あの情景が、今でもずっと心に残っているんです」

あらゆる形の文化に触れることが、自分に変化をもたらしたので、同じ経験を息子にもさせたいと思っています。

ケイステリと妻のオランダ出身アーティスト、アンニク・リグテモエットは、首都ヘルシンキにほど近いエスポーの自宅近くにアトリエを構えています。4歳の息子も多くの時間をそこで過ごし、自分のやりたいことをしています。ケイステリは息子が、「No Rules」やスター・ウォーズの曲をミックスするすごいDJになったと誇らしげに語ります。

「息子にいろいろ試させることが大切です。自分らしさを失わず、自分のやり方で実験する自由をもってほしいと思っています」

父と息子はよく一緒に創作活動に取り組みます。息子お気に入りのスター・ウォーズのキャラクターを写実的な水彩画で描き、寝室の壁に飾っています。二人は古いフィルムカメラで写真も撮っています。

「面白いものを撮って、現像に出して、写真が届くのを待つ。楽しく、ゆっくりとした活動です。スクリーンタイムで子どもを管理するより、この方がずっといい」

子どもと大人両方が楽しめる文化

フィンランドでは、父親は子どもの人生に積極的に関わっています。ケイステリは、ときには保育園を休ませて息子を博物館や公園に連れて行くこともあります。他の父親たちとともに、WhatsAppチャットグループでイベントの提案も行っています。

「少なくとも首都圏では、子どもたちが無料で楽しめるアクティビティがたくさんあります。ほとんど毎週末、出かけては面白いものに出くわすんです」

フィンランドでは、子どもを対象にしたカルチャーシーンは活気に満ちていて、展覧会、演劇、コンサート、ワークショップなど、あらゆる年齢向けにイベントが開催されています。ケイステリは息子と一緒にアクティブに、クリエイティブに、そして遊び心のあるアクティビティを特に楽しんでいます。お気に入りの場所

チームおすすめの子どもの向けカルチャーシーン

[LEIKKI
遊びのミュージアム](#)

「エスポーにある、遊びとおもちゃの歴史を紹介する素晴らしい博物館。もちろん館内でも遊べるし、小さな子どもたちにも見どころがたくさん」

[子どもバンド
フローベリン・パリカット](#)

「彼らのミュージックビデオを大スクリーンに映して、一緒に踊ります。2024年の夏には、フィンランド最大のフェスティバルのひとつRuis Rockで何千人もの大人たちの前で演奏しました」

[シベリウス・モニュメント
児童公園](#)

「フィンランドで最も有名な作曲家、ジャン・シベリウス・モニュメントの隣にある素晴らしい広場。ブランコやクライミング設備があり、子どもたちはスチール製の楽器を演奏できます」

のひとつは、作曲家ジャン・シベリウスのモニュメントの横にある遊び場で、子どもたちはもちろん、遊び好きな大人たちもスチール製の楽器を使って演奏できます。

ケイステリは、自分オリジナルの遊び場を作るのが夢だと語ります。

「遊びとアートを組み合わせ、子どもたちはよじ登ってアートを体感できるようにね。黄色いお尻の滑り台ができるのは間違いないでしょう」と、笑いながら言います。

「何をするにも子どものような遊び心を忘れないようにしています。自分のアートは遊び心にあふれた実験そのものですから」

5

フィンランド人のように じゃがいもを愛する 5つの理由

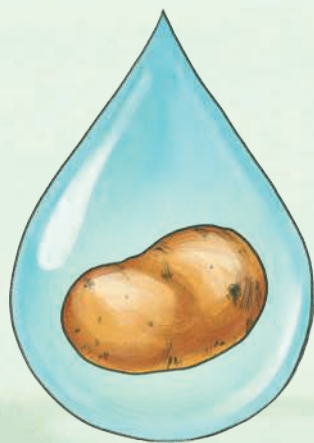
フィンランドでは、じゃがいもが嫌いな人はいません。じゃがいもを愛する理由は数え切れないほどありますが、ここでは5つご紹介します。

TEXT VEERA KAUKONIEMI
ILLUSTRATION HILLA RUUSKANEN

用途の広さは桁外れ

根菜ひとつで何種類の料理が作れるでしょうか。じゃがいもに関しては、可能性はほぼ無限にあります。じゃがいもの原産地は、現在のペルー南部とボリビア北西部です。フィンランドには、18世紀にドイツのブリキ職人によってもたらされました。初期のじゃがいも好きと数人の牧師が普及活動を熱心にしたおかげで、じゃがいもはフィンランド人の心をつかみました。じゃがいもがフィンランドを征服するというアイデアは非常に興味深く、2021年にはそれを題材にしたコメディ映画（Peruna－ジャガイモ）が製作されました。

現在、フィンランドのじゃがいもは形も大きさも食感も様々で、絹のように滑らかなマッシュポテト用加工のフレーク状や粉末状、でんぷん質の多いじゃがいも、スープやシチュー用の煮崩れしにくい小さいじゃがいも、フライドポテトに適したカットしやすい大きなじゃがいもなどがあります。トッピング次第では、素朴なベイクドポテトがバランスの取れた食事に变身します。チーズののったグラタンや、良質のバターと塩少々で茹でたもの、あるいはポテトスープも最高です。



気候変動の中で信頼できる食糧源

気候変動に配慮した食糧を選択肢に加えることが切実に求められているなか、じゃがいもは最も持続可能な選択肢のひとつです。国際的な研究により、じゃがいもはパスタや米よりも環境的に持続可能であることが最近明らかになりました。最も土地と水の効率がよく、二酸化炭素排出量の少ない作物のトップ10に入っており、栽培も容易です。

じゃがいもは丈夫で適応力があり、ほとんどどこでも育つので、気候に関係なく栽培するのに理想的な植物です。十分な水と栄養さえあれば、緑豊かな南部から栄養が少なく硬い大地の北部までフィンランド全土で、あまり手をかけずとも簡単に育てることができます。花壇やバケツでさえ育てることができるくらいです。

癒しと伝統、喜びと

フィンランドのじゃがいも料理は、心に沁みる究極のソウルフードです。幸せな日には喜びを、悲しい日には安らぎと癒しをもたらしてくれます。じゃがいもが、私たちの人生を支えてくれています。フィンランドの赤ちゃんが最初に口にする離乳食の多くはマッシュポテトです。

それほどフィンランド文化に根付いているので、祝いの席のごちそうでも、無意識にじゃがいもを使用しています。5月1日のメーデーの祝日には、フィンランド人はピクニックやポテトサラダで春の到来を祝います。真夏になると、シーズン最初の新じゃががご馳走に添えられて食卓にあがります。そして結婚式では、多くの人が茹でたじゃがいもと塩漬けの魚を使った前菜を選びます。じゃがいもはカレリアシチュー、サーモンスープ、トナカイのスープといった料理の食材として、葬儀の場にも出てきます。

お祭りを開催

毎年春になると、フィンランドのじゃがいも好きは初夏に出回る初物のじゃがいもを心待ちにしています。2011年、フィンランド南西部トゥルクのじゃがいも好きたちが、新じゃがフェスティバルを立ち上げました。このイベントは、じゃがいもが日々の家庭料理の定番としてはもちろん、美食家をもうならせる特別な一品でもあることを示しています。イベントでは、著名なシェフたちが、じゃがいもの炒め物や冷燻、じゃがいも

のデザートまで、さまざまな料理を作ります。フェスティバル創設者によれば、じゃがいもはワインと同じぐらい注目に値するといいます。じゃがいもとワインに共通するのは、テロワール（土壌と気候の複合効果）が特徴的な風味を生み出していることです。フィンランドのスーパーマーケットでじゃがいもの品揃えを見た人なら、この意見に頷くでしょう。じゃがいもにはそれぞれ特徴があり、場面や人の好みに合わせて、ぴったりのじゃがいもが見つかります。



イノベーションの火付け役

じゃがいもが持つさまざまな可能性が、フィンランドの食通たちにインスピレーションを与え、新商品の開発につながっています。じゃがいも使用の好例として、フィンランドの一部であるスウェーデン語圏の自治領、オーランド諸島を挙げることができます。この地域は、欧州の隠れたポテトチップス首都でもあるのです。新しいフレーバーがあれば、それに合うポテトチップスが開発される場所なのです。

近年最もよく知られたイノベーションのひとつに、「フレックス（FREX）」と呼ばれるじゃがいもがあります。完璧なじゃがいもを開発したいという、たった一人の願いから始まったじゃがいもの品種改良は、ミシュラン・スターを持つシェ

フから、一般家庭にまで高く評価されるようになりました。フレックスは、自然で持続可能な農法を重視し、本来の素朴な外観と、おいしく本物の味がするじゃがいもの生産を目指しています。これらのじゃがいもは、本物の味とエコロジカルな農業の原点に立ち返り、土壌の健全性と栄養循環を高める伝統的な手法に近代的なテクノロジーを組み合わせるという、より広い取り組みから生まれています。現在、フィンランドでは3種類の「フレックス」が栽培されています。フレックスの開発者タビオ・クヌーッティラは、伝統と自然の価値を尊重しながら、フィンランドの地方創生、雇用を創出することがフレックスの目標のひとつだと述べています。■

紛争調停に携わる4人のフィンランド人が、対話、理解、信頼を築くための秘訣を語ります。

TEXT LAURA IISALO PHOTOGRAPHY OUTI TÖRMÄLÄ

平和への道のり

デジタルによる平等

ヨハンナ・ポウタネン**はCMI(危機管理インシアティブ) マルッティ・アハティサーリ平和財団の「平和構築における女性」部門主任です。デジタルツールは和平プロセスをより平等にするのに役立ちます、と彼女は言います。**

「国際紛争であれ国内問題であれ、最初の一步は常に耳を傾けることです。私たちは往々にして、挙げられた要求だけに目を向けがちです。そうではなく、要求の根底にあるニーズや関心事は何なのかを理解しようとしなければなりません。

紛争に持続可能な形の解決をもたらすには、女性が平和構築プロセスに参画しなければなりません。世界の人口の半分以上を占めているにもかかわらず、女性の視点は十

分に反映されていません。私たちの仕事は、ハイレベルの調停者がジェンダーを包摂した調停、つまり性差別のない調停を行うためのツール、スキル、実践的な戦略を備えることです。

CMIでは10年前から、平和構築にデジタルプラットフォームやツールを活用してきました。テクノロジーは世界的な対話に新たなレイヤーをもたらし、他の方法ではリーチできない人々を参加させることができます。

私たちはデジタルプラットフォームを利用して、主な優先事項と幅広い参加者の関心事を特定・識別します。対面式の会話では、参加型分析と集団的な意味づけを強化するために活用されています。匿名性を提供することで、こうしたプラットフォームは参加者間のパワー・ダイナミクスの平等化や均衡化に役立ちます」

多様性の中の団結

Gutsy Goは、他人のために働くことが自分自身の幸福度を向上させ、社会の平和も促進するという思想を基礎にしています。創設者のアラム・アフラトゥニは、このメソッドがいかに特別かを語っています。

「調査によると、若者の80〜90%が、自分たちの最も重要な役割は世界がより良くなるよう変えることだと考えています。私たちは10年前、人々の福祉のために社会貢献プロジェクトを立ち上げたり、多様な集団の中で団結力を高めたりするような平和構築のスキルを教えるモデルをすべての学校に作ろうと決めました。

Gutsy Goは、フィンランドの20カ所以上の場所で、何千人もの若者と教師をトレーニングしてきました。たとえば生徒たちは、困っている人たちのために給食サービスを開発したり、高齢者のために野外活動を企画することで世代間ギャップを超えたり、刑務所からの出所者にITスキルを教えたり、移民の子どもたちの学校に通う不安と一緒に乗り越えたりしました。

各プロジェクトはビデオに記録され、ソーシャルメディアで共有されており、最も人気のある動画は、視聴者数が150万人を超えています」

「建設的で敬意のある会話は、耳を傾けることを通して生まれます」

すべては対話から始まる

Timeout は、互いを尊重した対話を築くためのメソッドです。Timeout財団のラウラ・アリッカCEO(最高経営責任者)は、「誰もが自分の意見を中断されことなく共有できることが重要です」と、言います。

「財団に入る前は、フィンランド福音ルーテル派教会で人権の専門家として働いていました。紛争地域と多文化プロジェクトの両方で働きながら、対話を生み出すものは何か、それを壊すものは何かを学びました。

Timeoutのメソッドでは、人々に目を向け、耳を傾けることができます。私たちは、Timeoutを可能な限りアクセスしやすく、使いやすいものにしました。資料やツールはサイトから無料で入手できます。

建設的で敬意のある会話は、耳を傾けることによって生まれます。誰もが自分の意見を中断されことなく共有できることが重要です。この方法は、職場、地域社会、学校、都市などで、選んだテーマについて理解を深めるために用いることができます。

意思決定に役立つ洞察を得るのが目的であることもあります。フィンランドの首相官邸でも、フィンランドの未来に関する報告書を作成するためにこの方法を用いました。50以上の都市に住む、さまざまな背景をもつ12歳から85歳までの300人以上が参加し、それぞれの意見や人生経験を分かち合いました」

仲間の力

VERSOプログラムでは、若者や子どもたちが調停のエキスパートになるためのトレーニングを提供しています。ディレクターのマイヤ・イエリーンは、あらゆるもめごとを学びの場と捉えています。

「私が特別な支援を必要とする若者たちに携わっていた1990年代、学校でのいじめが原因で多くの若者たちの人生が間違った方向に進んでしまうことを知りました。しかし、若者に調停者としての積極的な役割を与えたり、ピア・グループ(同じ境遇・価値観を持つ仲間)の良さを理解できたりする方法はありませんでした。そこで2000年、私は仕事仲間とともにVERSOを開発・設立しました。

VERSOプログラムでは、子どもたちは、日常的なトラブルが起きるとすぐに問題解決の専門家とみなされます。私たちは、若者や子どもたちだけでなく、学校や保育園の職員にも、あらゆるもめごとを学びの場と捉えるようトレーニングしています。誰かが仲間はずれにされたり、噂話や悪口を言われたりすることはよくあります。誰が悪いのかを追求するのではなく、一人ひとりが自分自身の葛藤を解決する貴重な専門家であるという考え方です。

対話を通じて、子どもや若者は互いの経験を理解し、もめごとの背後にあるニーズを認識することを学びます。これができて初めて、当事者は解決策を見出し、これに取り組むことができます。誰もが罰せられたり非難されるのではなく、より良い未来を築くための問題解決に焦点が当てられます」■

自由を愛した トーベ・ヤンソン

TEXT KRISTIINA ELLA MARKKANEN PHOTOGRAPHY PER OLOV JANSSON / MOOMIN CHARACTERS LTD

ムーミンの生みの親は、ただの風刺漫画家ではなく、一回の人生におさまらないほどの作品を生み出しました。彼女は愛、自由、海、そして冒険によって形作られた長い人生を送りました。そしてそのすべてが作品から感じ取れます。

トーベ・ヤンソンの本の中に、ムーミン一家と一時的に同居している気難しい哲学者、じゃこうねずみが登場します。食卓から魔法のようにケーキが消えてなくなっても、じゃこうねずみは気にすることもなく、ただ隅っこで静かに物思いに耽ろうとしています。いろいろ調べた結果、実は彼がそのケーキの上に座っていることがわかりました。

じゃこうねずみのおふざけの話は、人間の本質をとらえるヤンソンの能力を示した数多くある例のひとつにすぎません。ムーミンのキャラクターたちで最もよく知られるヤンソンは、画家、イラストレーター、風刺漫画家、作家など、多作で多才なアーティストで、一回の人生におさまらないほど数多くの作品を生み出しました。

「彼女の筆致は鮮やかで柔らかく、比類なき美しさを誇り、世界で最も素晴らしいもののひとつ」と評伝『ムーミンの生みの親 トーベ・ヤンソン』の著者である美術史家でノンフィクション作家のトゥーラ・カルヤライネンは言います。

自由に生きるために

多くの人に愛されているヤンソンの小説『少女ソフィアの夏』の中で、祖母はソフィアに自分で選択することの大切さを教え、「自由でありさえすれば、すべてがうまくいく」と、語ります。これはヤンソンの人生哲学を見事に要約しています。



ヘルシンキのカタヤノッカとカールティンカウブンキ トーベ・ヤンソンは1914年に生まれ、幼少期をヘルシンキの下町にある海辺の地区、カタヤノッカで過ごしました。西ヨーロッパ最大の正教会大聖堂であるウスペンスキー大聖堂のおひざもとで、彼女はよく絵を描きました。近くの公園には彼女の名前がつけられています。

大人になってからは、カールティンカウブンキ地区のウランリニンナカトゥ1番地にある天井の高いアトリエで作業し、暮らしました。団体見学にはムーミン・キャラクターズ社の許可が必要ですが、建物外壁にあしらわれた若き日のヤンソンのレリーフは、通りすがりの誰でも鑑賞することができます。

自由はヤンソンの作品における重要なテーマであり、しばしば登場キャラクターによって体现されています。例えば、ムーミンのキャラクターであるスナフキンは、テントで眠り、メランコリックなハーモニカを吹く孤独な放浪者です。夏が終わると、彼は荷物をまとめてムーミン谷を去り、冬を迎えます。

ヤンソンの作品は世界中で広く愛されるようになりましたが、彼女は自分のためだけに絵を描き、文章を書きました。こうした自由な生き方をするために、彼女は生涯をかけて戦ったのです。

子どもの頃、彼女はヘルシンキの海辺にあるヤンソン家の周りを一人で歩き回ることを許されていま

した。ヤンソン一家は、春と夏をヘルシンキの東にある島で、群島地域の大自然に囲まれて過ごしました。後にパリの名門美術学校エコール・デ・ボザールなどで学ぶこととなりますが、幼少期は学校で苦労しました。

「彼女は学校よりも、母親が読み聞かせてくれたスリリングな冒険物語に興味があったのです」と、カルヤライネンは言います。そのせいででしょうか、ムーミン谷には学校がありません。

海へのラブレター

トーベ・ヤンソンの人生の大半において、海がその舞台としてありました。もしかしたら、ヤンソン自身が体现しなかったのは、海の無限の広がりだったのかもしれませんが。海は好き放題やります。「あとからあとから、ザアツと音をたてて波が打ちよせ、むちゃくちゃにあわをたててあべれます。それでいて、またふしぎと静かでした」と、彼女は『ムーミンパ海へいく』で書いています。ムーミンたちが戯れる気分爽快なオアシスである水辺が、突如、ボートを沈めたりテントを引き裂いたりする予測不能な恐ろしい力に変わることがあります。

「彼女は海を崇拝していました。暗闇を恐れながらも、群島で長い間ひとりで過ごすことができたのです。海は彼女の自由の感覚を強めました」と、カルヤライネンは言います。

ヤンソンの作品のいくつかは、文字通り海の実ん中で、彼女に大きな影響を与えた島で書かれました。ヤンソンは、生涯のパートナーであるグラフィック・アーティストのトゥーリッキ・ピエティラと、ヘルシンキの東にある群島、ペッリングのクルーヴハル島で何度も夏を過ごしました。

岩だらけの小さなクルーヴハルは交通の便も悪く、電気も水道もありませんでしたが、ヤンソンとピエティラはこの島に惹かれ、小屋を建て

ました。ついに小屋が建ったとき、それは二人が望んでいた通りのものになりました。四方に窓があり、絵を描いたり文章を書いたりできる共同の机のある部屋です。

豊かな冒険が踊り続ける

ヤンソンの人間関係や経験は、彼女の本やコミックスの中に滲み出ています。トフスランとピフスランの切っても切れないムーミンコンビは、ヤンソンと舞台演出家のヴィヴィカ・バンドラーを表現しており、縞模様のシャツを着た賢く堅実なトゥーティッキはピエティラがモデルです。1968年に出版されたヤンソンの著書『彫刻家の娘』は、彼女自身の子供時代の体験に基づいています。

「彼女は、自分自身が生きたことも感じたこともない文章を一度も書いたことがない。自然の描写であれ、彼女の内面の表現であれ、表面的なものは何もないのです」

第二次世界大戦中、ヤンソンはヴィヴィカ・バンドラーと恋に落ちました。女性と恋に落ちるというのは新しい経験で、慣れないことでしたが、ヤンソンは友人への手紙の中で、「それはごく自然で正真正銘の真実なのよ。ここ最近では、豊かで優しく、そして激しく長いダンスをしているような日々だった」と、書いています。

今日、多くの人がトーベ・ヤンソンをクィアアイコン、そしてLGBTQ+問題の先駆者として見ていますが、それは当然のことです。厳格な規範主義の時代に、彼女はメインストリームに逆らったのです。フィンランドでは、ヤンソンが初めてレズビアンとの関係を結んでから数十年後の1970年代まで同性愛は違法でした。彼女は結婚もせず、子供もいませんでした。彼女の人生は彼女だけのものであり、他の誰のものでもありませんでした。

「彼女は抗議のプラカードや横断幕を掲げなかった。彼女にとって、それは自然な成り行きでした」と、カルヤライネンは言います。



クルーヴハル島ポルヴォー近郊のベッリング群島は、ヤンソンの人生と作品に大きな影響を与えました。彼女は生涯のパートナーであるトゥーリッキ・ピエティラとともにクルーヴハル島で28年間、夏を過ごし、後にそのコテージを地元の遺産協会に寄贈しました。クルーヴハルとその周辺の小島は自然保護区にもなっています。



テウヴァ教会 は、フィンランド西部セイナヨキ近郊にある自治体テウヴァにあり、トーベ・ヤンソンが手がけた唯一の教会祭壇画が見られます。「十人の乙女」は教会の石壁に描かれたもので、その鮮やかな色彩は完成から約70年経った現在でも輝きを失っていません。



ランッキ(コトゥカ) ヤンソンの『少女ソフィアの夏』は、アカデミー賞8回ノミネートに輝く俳優グレン・クロウズの主演で2024年に映画化されました。主なロケ地はコトゥカ沖の旧軍用島ランッキ島です。

ムーミンのダークなルーツを振り返る

ムーミン・キャラクターズ社は、ムーミンのすべての権利を所有する会社です。ムーミン80周年を祝うバンケーキ・パーティーは、本社では開かない、とロレフ・クラクストローム社長は言います。

「いつも、商業的なお祝いにはちょっと気が引けてしまうんです」

その代わりに、1945年に出版されたムーミンの最初の作品『小さなトロールと大きな洪水』に思いを馳せます。これはムーミン一家がムーミンパパを探す物語です。

「大洪水は、フィンランドと欧州で終結したばかりの戦争の比喩として解釈できます。ほとんどすべての家族が、父親、息子、あるいは兄弟といった誰かしらを失いました」

ムーミン・シリーズのこの最初の絵本に導入された多くの要素が、のちにムーミンの物語の特徴になったと、クラクストロームは言います。「トーベ・ヤンソンは、迫り来る大災害をドラマの要素として用い、キャラクターたちの典型的な行動を引き出しています。彼女はまた、「柔軟な家族」という概念も導入しています。探検の間に、一家はさまざまな生きものに出会います。しばらくの間家族の一員となる生きものもいれば、本当に家族となる生きものもいます」

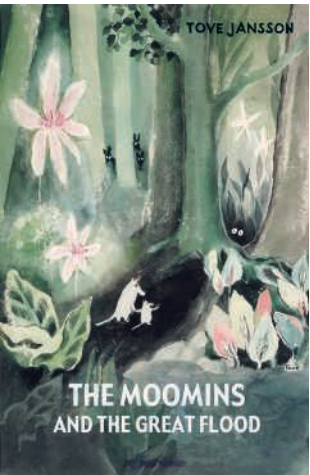
生きものたちはありのままに受け入れられ、同時に自分自身に全責任を負うことを求められます。ムーミン一家のこのようなアプローチは、ムーミン哲学の根幹をなすものと言えます。

「勇気が、ムーミンの物語で大切な部分を占めています。私たちの多くは恐れを感じ、自分自身の中に勇気を見つける必要がある。自由になり、何かを成し遂げるためには、その勇気が必要なのです。そうして初めて、私たちは寛大になり、ありのままの他者と向き合い、彼らを助けることができるのです」。

残念ながら、80年経った今もお、この移住の物語はかなり現代にも通じるものだと、クラクストロームは言います。

「現在、世界には2億人以上の難民がいます。膨大な数の子どもたちが故郷を失い、彼らの未来は不透明です」

この問題に取り組むため、ムーミン・キャ



「自由になり、何かを成し遂げるためには、勇気が必要なのです。そうして初めて、私たちは寛大になり、ありのままの他者と向き合い、彼らを助けることができるのです」

ラクターズ社は『小さなトロールと大きな洪水』のヤンソンの原画を基にデザインされたアート作品一式を、パートナー企業が商品として使用できるようライセンス供与しています。収益の一部は赤十字に寄付されます。目標は、国際赤十字に100万ユーロを寄付することです。

『小さなトロールと大きな洪水』はムーミン一家がムーミンパパと夢のムーミン屋敷を見つけるところで終わります。ムーミン誕生記念と英国における難民週間の一環として、ムーミン・キャラクターズ社は4都市の現代アーティストに、ムーミン屋敷を解釈した作品を地元の難民コミュニティとともに制作してもらいました。

「おそらくどの作品も見慣れた青い円柱状の建物には見えませんが、故郷が彼らにとって何を意味するのかを反映しています」と、クラクストロームは言います。■



ムーミンワールド(ナーンタリ) フィンランド西部ナーンタリにあるムーミン公式テーマパークは、毎年夏にオープンしています。来場者はムーミンのキャラクターに会い、彼らの家を訪れ、ムーミン谷とその不思議な世界を探検することができます。



ムーミン美術館(タンペレ) ムーミン美術館は、あらゆる年齢層のムーミンファンのための体験型美術館で、世界で唯一のムーミン美術館です。常設展と企画展の両方があり、トゥーリッキ・ピエティラによるジオラマのコレクションもあります。



ムーミン80周年 フィンランドの作家で画家のトーベ・ヤンソンによる『小さなトロールと大きな洪水』は、1945年に出版されました。このムーミンの最初の絵本には、中心的なキャラクターが登場。愛、尊敬、帰属といったテーマが扱われ、ヤンソンやムーミン一家を世界的に有名にしました。

MOOMIN® 